

## 社員の皆様へのメッセージ

株式会社 イナテック

代表取締役社長 稲垣良次

2016. 4  
No.272

### 在庫低減と内製化

先月の日経新聞『私の履歴書』は、アイリスオーヤマの大山社長でした。その文章の中には、イナテックが今、意識改革を進めようとしていることと同じような内容が書かれていました。

「欠品を避けるために在庫をたくさん持てば、経営を圧迫する。」

「作ったものを売るのではなく、売れたものを迅速に作るのだ。」

「好不況に関わらず利益を出す会社」

「できることは自前で手がけ、経験を社内に蓄積すべし」

このような記事が私の心に響きました。先月紹介したJIPMの渡辺先生のアドバイスを思い出しました。JIPMの究極の姿です。

「予知・予測が出来、予防保全ができれば、故障ゼロ、工程内不良ゼロが実現できる。そうならば、予備在庫はゼロが当たり前になる。」私の頭は非常にすっきりいたしました。

「よし！在庫ゼロは夢じゃないんだ。実行あるのみ。」

例えば試作について言えば、在庫ゼロの状態です。試作を作り、お客様に納めます。重要になるのは、注文があつてから、いかに短いリードタイムでお客様の要求される納期に応えられるか、ということなのです。

今現在、貯蔵品(刃具・治具・消耗品など)は2億6000万円あるのが現状です。問題は昨年5月の期首より2200万円増えていることです。『予知・予測・予防保全』の徹底で、すぐに使わない貯蔵品在庫を“ゼロ”にしようではありませんか。

次に内製化です。内製化によりノウハウの蓄積はできますし、問題点も見えてきます。また何よりも“ものづくり技術”が向上します。

加工点に関わる刃具・治具・クーラント・測定具の内製化を目指してまいります。まさしくアイリスオーヤマの社長のおっしゃる「好不況に関わらず利益を出す」イナテックグループを構築いたします。

### ぞうきんになれ

「社会のぞうきんになって社会をきれいにしなさい」

「自ら汚れてでも社会をきれいにする」

「障がいがあるうと貧しかろうと弱者は一人一人が国の宝です」

これは日経新聞「交遊抄」に載った山井和則氏の文章です。

イナテックも『おそうじ』を企業理念の一つとしております。おそうじを通して自分を磨き、まわりの人にも気遣える会社をめざしております。この「ぞうきんの教え」は、自らが汚れて会社を、社会をきれいにすることそのものではないかと思えます。

やはりイナテックの企業理念のとおりなのです。さあ、自信を持って実践していきましょう。

## 『老舗から見た日中企業の差』第2弾

2月に続き、イナテック平湖の表部長の報告をご紹介します。

### 中国企業経営に関する反省

#### ●経営目的の差

中国大半の企業は、主業で成功した後すぐに多角化経営を行う。(不動産投資、証券投資など)中国企業は儲けを目的としているのに対し、日本企業は事業を行うことを目的としている。

#### ●技術への理解の差

中国企業にとつて、技術＝最新鋭設備。最新鋭設備に大金をかけても惜しまないが、技術者の育成にお金をかけたがらない。まして全員に教育する会社はごくわずかである。

#### ●スピードへの理解の差

中国人は早くて大きな躍進を追求し、結果をすぐに求める。日本人は保守的に見えるが、本当は慎重でコツコツ、プロ意識が高くまじめである。

中国の人たちがこのような研究をしていると

「TPMドットコム」

いうことは、近い将来必ず日本の経営に追いついてくるはず。その証拠にイナテック平湖の社員の人たちは、日本の経営を学び実行しています。

私たちはお互いの国民性を理解し合いながら、日中の発展に貢献いたします。

今月は日本能率協会コンサルティングの機関紙「TPMドットコム」に載った記事を同封いたしました。実はイナテックという会社は、このように評価いただいた会社なのです。まだまだやりたらないことはたくさんありますが、2017年TPM特別賞継続賞に向かつて全員参加で頑張り、自分自身を磨いてください。よろしくお願いたします。常日頃に感謝です。

### 三四

悠長之趣、不得於醱釀、而得於駁菽飲水。惆悵之懷、不生於枯寂、而生於品竹調絲。固知、濃處味常短、淡中趣獨真也。

悠長の趣は、醱釀に得ずして、菽を駁り水を飲むに得。惆悵の懷は、枯寂に生ぜずして、竹を品し糸を調ぶるに生ず。固に知る、濃處の味わいは常に短く、淡中の趣は独り真なるを。

一 醱釀——濃い酒。「醱」は酔の味の濃い意。二 菽を駁り水を飲む——豆のかゆをすり、水を飲む。貧しい暮らしにいう。「菽」は豆。礼記に「子路曰く、傷ましいかな貧や、生きては以て養をなすことなく、死しては以て礼をなすことなきなり」と。孔子曰く、菽を駁り水を飲み、その飲を尽くす、これをこれ孝と謂う、と(檀弓下)とあり、菽水の飲ともいう。三 惆悵の懷——嘆き悲しむ思い。ここでは、ものあわれを感じる意。白楽天の詩に「惆悵す、春掃りて留むるを得ざるを。紫藤の花下、漸くにして黄昏なり」(三月三十日題慈恩寺)とある。四 竹を品し糸を調ぶ——笛を吹き琴の糸の調子を調える。素朴な音色にいう。

心ゆく悠長な趣きは、味の濃い美酒を飲んでいる(富める暮らし)の中からは得られないで、むしろ豆のかゆをすり水を飲む(貧しい暮らし)の中からは生まれるものである。また、ものあわれを感じるのは、干からびた静けさの中からは生まれないで、むしろ笛を吹き糸を調える素朴な音色から生まれるものである。これから見ても、濃厚な味わいは、常に長く続くものではなくして、ただ淡白な味わいの中に見られる趣きだけが、真実なものであることがわかる。